

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



編輯 香野上野 印刷所 香野上野
發行 香野上野 印刷所 香野上野
清田 印刷所 清田
山田 印刷所 山田
市川 印刷所 市川
和野 印刷所 和野

鮮滿支視察談

林 貞 三

私は去る五月八日出発約四十日間に亘り鮮滿支の各地を旅行する機会を得ました。この四十日間の日程は決して長いものではなく、完全に視察するには全く餘りに短時日ではあります。この四十日間に私の眼に映じた彼の地の風俗、習慣、産業の各方面に亘りまして、少々私の主観を加味せるものを鮮滿支の地圖の順を追って御話して行かうと思ひます。

朝鮮に第一歩を踏み入れて

昔朝鮮は現在の日支滿蒙露の諸國の中間に介在し被支配國の關係に置かれたので従つて階級思想が發達して、他く事なき官吏の横暴を發揮して居た。例へば苛酷に過ぎる迄の税金の附加があつたのであります。その爲に下層農民の生活戦線が極度に感威し常に貧困のどん底に生活する事に甘んじ、爲に一つの諷刺と捨鉢の氣持に向上心は至められ、正義觀念は彼等にとつては一片の反古紙同様のものとなつてしまつた。現在鮮人で小學教育を受けつゝ有るものは全體の三割に過ぎないがその授業も四時間中、一時間は體操、或は唱歌と言つた様な肩の凝らないもの、一時間は普通學科、他の二時間は之を授業料の催促に當て、居ると言ふ様な實例もある由で、一驚を禁じ得なかつたのであります。之は何を物語るだらうか？ 往時の官吏の専制擧取して歡樂に耽けつた民衆は古來、小説、詩歌、劇等に織込まれて後世に残るものも少くない。こゝに官吏の横暴を暴露し、而も歡

になつた。所がこの殿様も餘りに綺麗な春香に魅惑されて春香を口説いたが、一度契つた春香の態度には嚴然たるものがあつた。彼の權力を以つてしては如何なる事をも彼の意のままにならぬ事はなかつた。彼は春香をも權力でもつて我物にしやうとしたが春香の答はノウであつた。そこで殿様の怒、絶頂に達し愈々春香に死刑の宣告を下してしまつたのである。一方話は李夢龍に飛んで戀人との逢ふ瀬を生木の様にさかれた彼は一心發起して勉學し丁度今で云ふと高等文官の試験にパスし、地方の殿様の政治を巡視する檢察官になつた。丁度春香が斷頭臺へ來合はせ酒色に耽り居る殿様を處罰し、春香を助けたと云ふ話。如何にもハッピー、エンドに終つては居るが、こゝに書かれた殿様と賤しき春香なる一女性に當時の鮮人の全部を代表して斯くあり度き希望を述べたものでその反面に横暴なる支配階級と、搾取された階級の悲惨なる昔時の光景を遺憾なく表現して居ると思ふ。兎に角現在の朝鮮の農民は貧困の者多く耕地面積は一反歩に過ぎぬ様なものが多數で大農者の手傳を引つゝ生活すると云ふ悲惨なるものが少くない。それにも拘らず正月などは一月も遊んで暮すと云つた悪習慣が残つて居り、向上心が失せてしまつて居ると見え見られる。甚だしいのにならんと監督されなければ仕事はしない云ふ調子である。斯様な状態であるが故に、もし朝鮮に養蠶を奨励し様とするならば、三年の準備期間を如何に暮すか當面の問題となつて来る。

そこで現在ではこの地方の養蠶を發達させるに何等の養蠶を奨励する方法、或は又蠶室も極簡易なものに奨励し飼育させる様に特別の工夫が必要である。一枚の蠶種を掃立て得ない養蠶家が全體の七〇%を占めて居る現状であるから、先づ一戸當りの掃立量を増加させる事が目下の急務である。現在では、繭を集め工場迄搬出するに内地に比較して一掛、糸歩が一掛、絲格が二掛以下で二掛、工場の經營費が一掛、合計五掛繭を安く買はねばならない。

以上の様に朝鮮の文化は極幼稚であるがさて吾々が一度大陸政策の方向に眼を向けた時に、當然考へられるのは足場としての朝鮮である。又もし万不幸にして〇〇との間に風雲急を告ぐる様な場合があつたと假定しても、いざと云ふ場合は先づ朝鮮の物資で當座は間に合はせねばならない事は滿洲、日支兩事變の經驗に徴しても明である。現に最近北鮮に重工業、南鮮に農業と力を致し、營々として新時代の建設に邁進しつゝある。南大將は鮮人に次の三ヶ條を誓詞として與へて居る。

第一、吾等は皇國臣民なり、忠誠以つて君國に報ぜん
第二、吾等皇國臣民は互に信愛協力し以つて團結を堅くせん
第三、我等皇國臣民は、忍苦耐難力を養ひ以つて皇道を宣揚せん
斯様に朝鮮を眺めたる時、地理的の重要性が判然として來ると同時に皇國臣民としての次第に發達すべきであり、又されるものと信ずる。

現代乾繭機界ノ王座
大和式自動輸送乾繭機

二五九八年代表型

【各種型錄贈呈】

製作發賣元 株式會社 大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目
特許大和式自動輸送乾繭機
特許大和式自動人絹乾燥機
特許帶川三光式乾燥機
特許やまざき式淨水裝置
特許サンコー式廢湯吸熱器
特許サンコー式高壓ポンプ
特許サンコー式

支那を見て第一に頭に來る事は國家的に内容の整はない事である。この事に就いては毎日の新聞紙上では或は雜誌等に觀察して居た支那と寸分違はないものを見て呉れた。之れは國民が國家の恩恵を微塵も受けて居ない所に原因するものと思ふ。然し有史以來四千年の歴史を持つ社會は嚴として認めざるを得ない。此處に注視すべきものがある。そこで彼等は社會人として生活して行く爲には決して人の惡口は云はず信用を維持する事に最善の努力を致し、約束は絶対に破る。が然し義を見てせざるは勇無きなりと云ふ言葉は支那人には該當しない。彼は俺、人は人の心情である。之れに就いて私が天津郊外で目撃した事であるが、それは日中道路の最中で喧嘩をして居る二人の男があつても誰も之を止め様とする者はなく、皆見て見ぬ振りをして通り過ぎてしまふエゴイストである。自分の爲めの社會生活でなかつたならば決して開か

廣眺たる支那の平原に立ちて

吾々はこの強い支那軍を打破つてくれる皇軍の奮闘の努力に感謝し、能はざるも...

更に蒙疆の奥地へ 此處には蒙疆自治聯合委員會なるものがあつて、蒙古聯合政府、察南自治政府...

蠶絲學雜誌十卷四號紹介

蠶絲學雜誌は左記の内容により發行いたします。近日配本の事と存じます。特に金子先生の記念號といたしました。

第十卷第四號(故金子博士記念號)目次 (昭和十三年六月) 金子博士の業績 追報 研究報文抄録 A-H 井上柳橋、浦生俊興、小松忠一郎...

イ等の憚る血潮の流れる蒙古民族は唯五〇万人の少きを數ふるに過ぎない。...

滿洲を語る

滿洲に居住する民族は、地理的關係が種々の民族の混合である。その主なるものは日、鮮、滿、蒙、蒙の五族である。



於蒙古天鎮驛 林平野 貞一君

製絲科出身の悩み

吾々が母校上田蠶絲專門學校は、初め養蠶科と製絲科の二科であつた、その後時勢の進運に伴ひ現在の絹織織科の前身たる絹織織科が設置され、次に教養養成科の出現を見たのである。

最後に結びとして 一般民族は以上の様であるが、最後の私に支那支那民族の困窮は一通りのも...

然るに製絲科學生は三年に進學して初めて専門學校らしい學科を得て密かに家郷に誇り得たものである、それは主として紡織關係の學科であつた、之等紡織關係の學科を除いては、中等學校に毛の生えたる程度基礎學科に過ぎないものである...

母校ニユース

第一回集團勤勞作業 勤勞精神と集團訓練作興の折柄母校では其第一回集團勤勞作業として六月四日午前十時より全校職員備生徒による泰安殿附近及び運動場の清掃を實施した。約二時間にして終了大日本帝國萬歳を三唱して解散した。

養成科生徒ハイキング 六月五日の第一日曜に養成科一、二年の全生徒は、志田、山田、古平の諸講師、小松副手、堀内教諭引率の下に新鹿澤に一日の清遊を試み、氣焔を上げた。

小山少尉新任 養成科社會教育課に轉任された石井中尉の後任として昭和九年以來田中町東部實科中等學校に居られた後備歩兵少尉小山和夫氏が六月八日付を以つて休職教師を囑託され學生課に勤務される事になった。同氏は當年三十六歳獨身で新進氣鋭の士である。

行元生徒主事全國生徒主事會議並に集團勤勞作業指導者講習會出席 六月十六日より十八日迄三日間母校生徒主事行元先生は文部省で開催された直轄學校學生主事會議出席し、二十日より五日間文部省集團勤勞作業指導者講習會の第二會場三重高農に於て同講習會を受けられた。主事會議に於ける聴取事項は「時局下に於ける學生主事の動向如何」諸問題事項は「時局に對處すべき學生主事指導の具體的方策如何」協議事項は「日本諸學振興委員會並公開講演會に關する件」、「最近の思想動向に關する件」、「日本文化講義に關する件」、「國體の本義解説叢書其他資料の普及徹底に關する件」の四件で、講習會に於ては奉仕作業實施方法の協議、諸種の農事作業、其他研究討議があつた。

東京高醫學生來訪 東京高等醫學校養成科二年生約四〇名は木暮教授に引率されて上田、長野、松本の養蠶關係視察旅行の途次、六月十九日(日)母校を訪問され、校内を一巡見學後母校蠶二生徒主催の千曲會館に於ける歓迎會に臨み正午長野に向つた。同歓迎會には井上校長始め遠藤課長、佐藤科長、佐藤、浦生教授、山口助教、宮坂講師が出席された。

絲三生徒浦野君獲賞 製絲科三年選科生浦野君は先般校外實習に出るた

が〇〇令を受け直ちに歸校六月〇〇日職員生徒の見送りを受け郷里須坂に向ひ、〇〇日〇〇聯隊に入隊された。

野球試合 六月十八日製絲部對本館の野球試合を行つたが製絲部ベツテリ山田、山上兩氏の出來榮物づく結局十三對五で製絲部の勝となる。又二十五日には養蠶科職員チームと本館チームの試合あり養蠶チームは全く練習不足の爲十三對五にて本館チームに勝を讓つた。

貯蓄報國運動 國策遂行進進の爲勤儉貯蓄が官公署、會社、工場、各種團體、一般民衆に至るまで徹底的に強調され實施されてゐることは各人御承知の通りである。母校でも六月二十日第四教室に於て職員備生一同に校長先生から貯蓄報國の勸誘、獎勵の御話があつた。

紡織科職員學生懇談會 紡織科では六月二十日午後一時より第十三教室にて職員と三年、二年の生徒と校外實習に關する懇談會を行つた。職員側からは實習中の諸注意、三年生からは体驗談、二年生からは諸種の質問あり午後四時有意義に終つた。

春蠶產繭額 春蠶は蠶三、蠶二兩學年が飼育したが蠶三は種繭飼育で次の産繭額は殆んど大部分蠶二飼育のものであつて六月二十日製絲部へ引渡された。

蠶三採種實習 種繭飼育實習を終つた養蠶科三年生は六月二十日採種室の消毒をやつて二十一日より採種實習を開始した。採種數量は系統維持品類が四一種、國蠶系原種が一六種、交雜種一三種で、七月十日頃終了する豫定である。擔任指導者は山口助教、小林、瀧澤兩副手である。

蠶二生徒長野松本見學 春蠶飼育實習を終へた養蠶科二年生三十二名は六月二十一日宮坂講師、鏗家副手引率の下に午後七時上田東驛をバスにて出發九時半長野着十時より農事試驗場、蠶業試驗場、測候所、放送局等を見學午後六時歸校した。蠶業試驗場では水井場長の本蠶蠶業情勢に關する講話があつた。

次いで二十六日には浦生教授、關副手に引率されて午前五時四分上田驛發にて

松本地方見學に出た。八時八分松本驛着驛頭出張途次の倉澤教授、齋藤菊雄氏、松本蠶試の藤本氏等の出迎へを受け有明村に至り長野蠶試及び母校の天祥蠶飼育林を倉澤教授、横山忠夫氏の説明にて見學し茶果の後片倉普及團、全製絲場、全試驗所を見學して淺間温泉小柳旅館に投宿した。當夜は安寝支會の歓迎會を受けた。翌日は午前八時半より蠶業取締所蠶業試驗場、天主閣、蠶絲試驗支場、工業試驗場、繭檢定所等を見學し午後四時頃驛にて解散各自休暇故郷歸した。

林教授視察報告會 五月九日出發し朝鮮滿洲及北支の視察旅行を終へられて六月十八日歸校された林先生は二十二日午前十一時より一時間第四教室に於て職員生徒一同に彼の民情及び産業情勢を話され一同の認識を深めた。尚引續いて職員一同は千曲會館に歓迎會を開いて晝食を共にし同先生を圍んで座談を行つた。

乾繭實習 製絲部に於ては例年の様に六月二十二日正午から六月二十五日正午迄養蠶科二年、二十五日正午から二十八日正午迄製絲科一年の乾繭實習を行つた。尚六月二十一日と全二十八日の午後には教婦養成科の一、二年の生徒の實習を行つた。

配屬將校中佐佐藤 昭和七年二月歩兵第十五聯隊副官として上海に出征、其の後北滿に轉じて勇躍奮闘された當時少佐の谷先生は昭和八年五月歩兵第五十聯隊付となつて母校に配屬され翌九年八月には中佐に昇進、今回は懐かしの高崎歩兵第十五聯隊留守隊長に榮進された。赴任以來四年半の間、教練に亦學生訓育に至極明瞭に熱心に盡力された事は校内誰も印象を深くしてゐる所である。將來益々あの知性で、あの明朗さでぐんぐん榮進されん事を願つて止まない。

二十三日には公園内富貴にて校内職員にて送別會を開いたが席上同先生の明朗さと健康さと言ふか實力と言ふか益々々々感ぜられた。二十八日午前十時三十分の送別會に於ては、上小關係者多數の見送りを受けて上田驛發高崎に赴任された。

山田眞人氏講師となる 本年四月より母校養成科に勤務する山田眞人氏(製絲一八)は六月二十三日附を以つて講師となり養成科の數學、物理學、製絲論、關

係法規、工場管理、製絲原料論、製絲實習を擔任される事となつた。

新野元治郎氏新任 以前日東製絲原ノ町工場原料課に勤められた新野元治郎氏(蠶二)は退任後實家に在つたが六月二十三日付母校副手となり養蠶科蠶種部に勤められる事となつた。

新任蠶絲課長來訪 群馬縣より長野縣蠶絲課長に榮轉された西村實二氏は六月二十四日母校及び市内蠶絲業團體に挨拶に來られた。午後四時半より上小蠶種業團體主催にて香青軒にて歓迎會が催され母校からも八名出席、非常な盛會であつた。

絲一生徒市場見學 製絲科一年生三十二名は六月二十四日萩原助教に引率されて坂城市場、篠之井市場の取引狀況及び篠之井繭檢定所を見學した。

紡一生徒養蠶ハイキング 大体第一學期授業も終り校内實習に入らうとする六月二十五、六日紡織科一年生約三十名は兩期中の天氣を見込んで菅平へ一泊のハイキングを試みた。生憎二十五日は雨でヒュッテ内に集りながら翌日は晴天に恵まれ猪岳、四阿山等に登山する者もあつた。

學生勤勞奉仕 統後の譲りとして出征兵士家業に勤勞奉仕する美舉が一般になされてゐるが母校でも六月二十七日は蠶三生徒約二十五名が遠藤教務課長、行元生徒主事指揮の下に常入區某氏の三百坪の麥刈、耕起に午前中勤勞奉仕し、翌二十八日には紡一生徒約十五名が新田區の關口、全、中澤三氏の麥刈、耕起に午前中奉仕し午後別班がなす管の所雨にて中止した。尚この奉仕には養蠶科、紡織科の職員も多數参加された。

田玉層書記に昇進 大正十三年六月母校會計課として養蠶部事務室に養蠶事務會計、千曲會事務を執られ昭和二年八月庶務課に轉ぜられた田玉龜太郎氏は今回六月三十日付を以つて書記に昇進された。同氏は本年四十五歳で新進氣鋭とは申されぬが母校に就任以來十五年間實に忠實に熱心に努められた。益々張り切つた氣持で御勤め下さることを希む。

絲一夏蠶飼育實習 例年の如く製絲科一年生は一學期授業終了後引續いて七月一日より養蠶實習に入つた。各人蠶量一五瓦宛で擔任指導者は佐藤春太郎教授小林、市原兩副手である。

御挨拶 謹啓暑氣日毎に加はり候折柄皆様に如何に御座り候や私儀は本校に職を奉じて居り候十五年、諸先生並に皆様の御鞭撻に益々過當に勤め居り候處今回不圖書記を拜命致し候に就ては益々勉勵其責を完ふせん覺悟に御座候間今後共一層の御指導御鞭撻の程御願申上度如斯御座候。 田玉龜太郎 敬白

新任挨拶 謹啓酷暑漸く加はり候折柄皆様に如何に御座り候や今度不肖私儀は皆様の母校に職を命ぜられ學生活に勤勞致し候に就ては益々勉勵其責を完ふせん覺悟に御座候間今後共一層の御指導御鞭撻の程御願申上度如斯御座候。 小山和夫 敬白

御挨拶 謹啓暑氣愈々加はり候折柄皆様に如何に御座り候や私儀は本校に職を奉じて居り候十五年、諸先生並に皆様の御鞭撻に益々過當に勤め居り候處今回不圖書記を拜命致し候に就ては益々勉勵其責を完ふせん覺悟に御座候間今後共一層の御指導御鞭撻の程御願申上度如斯御座候。 秋田縣大曲町 縣立大曲農業學校 中澤二郎 敬白

轉居御挨拶 謹啓時局愈々多難の折柄皆様に如何に御座り候や私儀は本校に職を奉じて居り候十五年、諸先生並に皆様の御鞭撻に益々過當に勤め居り候處今回不圖書記を拜命致し候に就ては益々勉勵其責を完ふせん覺悟に御座候間今後共一層の御指導御鞭撻の程御願申上度如斯御座候。 上田製絲專門學校官舎 山田眞人 敬白

故金子教授遺兒養育
資金募集急告

謹啓時下梅雨の候益々御清移の段奉
慶賀候
陳者豫而御案内申上置候故金子教授
遺兒養育資金募集の申込期間は已に
経過致居候就而日頃御多用の爲御失
念の方は此際至急御申込被下様折入
つて奉懇願候
尙拂込方法は九月末迄分割拂差支無
之候
昭和三十二年七月
敬具

故金子教授遺兒養育
資金募集事務所
井上 柳 梧

故金子教授遺兒養育
育資金申込分報告 (第二回)

- 金百圓也 東洋紡績株式會社
金五十圓也 中環 井上 柳 梧
金拾圓也 針塚長太郎 和田仙太郎
金貳拾圓也 遠藤保太郎 岡徳治郎
谷 永源 増澤文徳 壹岐敏夫
岩永源 黒澤博造 佐藤利一
金拾五圓也 聖心女子學院職員有志
金拾圓也 和野三郎 遠藤壽一
金拾圓也 齊藤格次 佐藤春太郎
金拾圓也 須田新一郎 倉澤美徳
金拾圓也 石川新一郎 明形輝司
金拾圓也 吉中五郎一 片倉三平
金拾圓也 柴田勝太郎 加瀬 勉
平野 友七 今井行雄 石森直人
阿藤 質 内田 浩
金七圓也 原田 侃 三宅玉留
金五圓也 武谷琢美 飯島俊一
高橋 英 矢野榮輝 馬場恒武
野崎 清 諸岡市郎 丹野直高
横内 豊彦 眞正己 會山直高
峰村新一郎 山口定次郎 小野新太郎
目元 自昭 山口清和 小松忠一郎
小見 益夫 井上 敏 門脇博明
石丸 三郎 比嘉政雄 藤田道義
岩野 誠一 福井玉夫 富坂安三郎
島田 林助 志賀章雄 平塚英吉
金四圓也 志賀章雄 西澤正一
金四圓也 山岡勘一 山崎 壽
松原幸彌太

故金子教授遺兒養育
育資金申込分報告 (第三回)

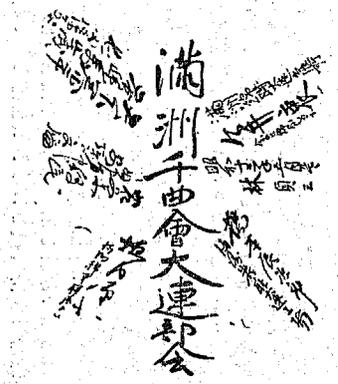
- 金百圓也 東洋紡績株式會社
金五十圓也 中環 井上 柳 梧
金拾圓也 針塚長太郎 和田仙太郎
金貳拾圓也 遠藤保太郎 岡徳治郎
谷 永源 増澤文徳 壹岐敏夫
岩永源 黒澤博造 佐藤利一
金拾五圓也 聖心女子學院職員有志
金拾圓也 和野三郎 遠藤壽一
金拾圓也 齊藤格次 佐藤春太郎
金拾圓也 須田新一郎 倉澤美徳
金拾圓也 石川新一郎 明形輝司
金拾圓也 吉中五郎一 片倉三平
金拾圓也 柴田勝太郎 加瀬 勉
平野 友七 今井行雄 石森直人
阿藤 質 内田 浩
金七圓也 原田 侃 三宅玉留
金五圓也 武谷琢美 飯島俊一
高橋 英 矢野榮輝 馬場恒武
野崎 清 諸岡市郎 丹野直高
横内 豊彦 眞正己 會山直高
峰村新一郎 山口定次郎 小野新太郎
目元 自昭 山口清和 小松忠一郎
小見 益夫 井上 敏 門脇博明
石丸 三郎 比嘉政雄 藤田道義
岩野 誠一 福井玉夫 富坂安三郎
島田 林助 志賀章雄 平塚英吉
金四圓也 志賀章雄 西澤正一
金四圓也 山岡勘一 山崎 壽
松原幸彌太

- 成尾喜八郎 關野幹次郎 母袋忠右衛門
藤本治義 平林 茂 小登 晋
市瀨武藏 宮本 静 向井 清
阿形一三 窪田 潤 荻原清治
小林 尚一 小林清丸 湯原 醇
湯澤重敬 高橋眞澄 阿久澤孝典
宮下丈夫 多田定平 飯塚忠一郎
櫻井 基 河合式太郎 六川忠一郎
金貳圓五拾錢也 竹内 善吾
金貳圓也 鈴木雄七 加藤省三
北原 至 兒玉信尊 小山 光
内藤 繁吉 宮尾行雄 依田寛之助
青木 幹男 石井清司 吉田 信
和野 三郎 都筑貞吉 松村 豊
廣瀬芳三郎 早乙女徳藏 伊藤 敏
中島角太郎 皆川 三郎 倉澤 文夫
香山 護 北島三省 尾藤 文三
中澤 勝也 大澤孝三 尾藤 文三
白井俊明 秋山武一郎 山崎 典次
金壹圓五拾錢也 山崎 典次
山田良人 征矢克郎 清水 英一
小本曾良雄 古平庄衛 小松 忠
日幡 映一 和野 三郎 北野 三郎
金壹圓也 關 嘉四郎 岡本 正男
森戸 晋 上野慶次郎 針塚長太郎
島田 博 門平潤一郎 針塚長太郎
小井土英二 小林 敏 窪田 潤
三井部 満 關 傳夫 窪田 潤
戸塚 一 小澤利雄 志田 敬夫
市原 政治 清水運策 春原良太郎
羽田 大正 久保藤一 宮原大正治
宮永 齊 宮前邦雄 内藤 良雄
宮澤 勇 瀧澤 幸 内藤 良雄
細川 俊雄 白倉 一男 内藤 良雄
金五拾錢也 白倉 一男
計金千七百七拾七圓也
通計金千四百四拾七圓五拾錢也

支會通信
農學千曲會だより
六月九、十日文部省主催の全國農業學校
長會議が文部省で開催の機に際し九日會
議終了後不忍池畔の料亭に千曲會の懇親
會を開催した。本年は新會員として櫻井
君と土岡君とを迎へ計十名となつて大に
意を強うした。内小野君と佐藤君とは當
夜都合がつかず、土岡君は如何なる都合
なりしか御上京がなかつたのは遺憾であ
つた。
誰が開會を宣するでもなく和氣堂に満ち
大いに飲み農業教育を論じ、學校經營の
抱負を語り、上田時代の追憶談に花を
咲かせ時の移るを忘れた。席上針塚先生
井上校長に寄書を送り御多幸を祝福した
午後十時過母校の萬歳を三唱して霖雨の
中を次會を約束して散會した。因みに本
年の出席メンバーは次の通りである。
長野縣上高井農業學校 佐谷戸健次郎
宮城縣伊具農業學校 本間 直人
長野縣南安北部農業學校 山本 辰五郎
兵庫縣立佐用農業學校 林 新一
愛知縣作手農林學校 稻石 佐一
鹿児島縣立宮城農藝學校櫻井 吉利
岐阜縣益田農林學校 鍵谷 傳
七月一日 (林 記)

大連に於ける林教授
歡迎會
五月二十七日鮮滿支視察の旅に出られた
林教授を大連に迎へた大連の有志五名は
同教授を圍んで盛大な歡迎會を開き、懐
かしき談笑に花を咲かせ次の寄書を記念
に残した。(今井)

滿洲出張の香山清和、
湯原諒兩氏よりの便り
謹啓時下梅雨不順の候には存じ候へ共
益々御健勝にて御精勵の事と存奉候
陳者 出發以來多忙に度粉れ御無音に
打過ぎ申譯無之候。十五日上海に發、名古屋
にては生藤検査所に一寸敬意を表し星
田君、佐野君の見送りを受けて十六日正
午「うすり」丸に乗船途中波も多少大
きくあり候へ共一同元氣にて十九日午前
九時大連に到着仕候。今井氏、橋本辰
次郎君、山内龍一君、滿洲製絲會社側の
小坂工場長以下二氏の出迎を受け外に垣
内源一君、滿洲製絲より事務員二氏を加
り料亭にて歡迎を受け大連出張は九時頃
になり夜十一時頃漸く目的地に到着仕候
二十日より工場に出勤、機械の据付を
開始仕候。据付は「ミール」二臺豫定の處
外に「カド二組(四臺)」、淨棉機一臺有之
然も何れも博物館行きの如き古機械にて
大いに苦しめられ居り候へ共完成して歸
る確信は有之候へは御休心被下度候。滿
洲は日暮れ遅く午後九時頃になつても未
だ明るく其故工場の退場時間は午後七時
と云ふ譯にて毎度起床時間は十二時迄と
云ふ状態に有之候。瓦房店の町は人口約
三萬五千、其の中内地人は五千にて輕井
澤と云ふ様な感じの處、道路整頓、水道
完備、蠶も敷居らず夜は蚊は不用、
日中は暑きも夜は涼しく想像より樂に
有之候。此の工場は三萬錫の紡績工場な
るも未だ一萬五千錫の運轉に至らず据付
中と云ふ處にて滿洲第一最新式工場にて
心地好く候。知らぬ他國滿人許りの中へ
參り候も工場には山内君が居り種々便宜
を計られ呉れ、垣内源一君は既に兩三度
工場に來り先日は大山融君が懇々訪問し
來り一夜を語り明し申候。其他滿洲支會
員諸氏よりは懇切なる通信多數頂き内地
にあるが如き心地にて働き居り候。馴れ
ぬ仕事に長時間の爲めへとくになつて
歸り、歸ると直ちに申譯無しと思ひ状
にて何れも手に付かず申譯無しと思ひ状
つても延引した次第何卒御寛恕被下度候
この手紙も三日がかりにて書き上げた
ものなれば見るもの聞かぬもの珍しく書き
度き事多數有之候も筆に托せず失禮仕り
候。又折を見て近況御報告致成存居り候
亂筆御判讀被下度候。末筆乍ら出發の際
には御禮券々近況御報告迄如斯御座候。
(六月廿九日校長先生宛)



暑中御見舞 昭和十三年盛夏 上田蠶絲專門學校 萩原清治

暑中御見舞 昭和十三年盛夏 上田蠶絲專門學校 阿久澤孝典

會員動靜 (七月五日) 小山和夫(現職) 勤)本校學生課(住)上田市市常田、村井房吉方

編輯室より 暑中御見舞申し上げます 昭和十三年盛夏 千曲時報編輯部

優良蠶種案内 昭和十四年度春蠶種 分離白一號 絲質特優